

石川

ISHIKAWA PREFECTURAL  
MUSEUM OF HISTORY

# れきはく

No.153  
2026.2.3

れきはくで発見!

想像上の  
いきものたち

特集

双龍図(部分) 森西園筆 江戸時代後期 当館蔵

特集



# れきはくで発見! 想像上の いきものたち

表紙  
解説

龍  
りゅう

そうりゅうず  
— 双龍図 (部分) —

◆ 森西園筆 江戸時代後期 当館蔵

加賀藩御用絵師・森西園 (1783~1859) が、伝説上のいきものの代表格・龍を描く。対幅の双龍図で、左の龍は口を開け、右の龍は口を閉じる阿吽の態をなす。



常設展  
展示中!



さるおにつの  
— 猿鬼の角 —

◆ 七尾市能登島向田町 伊夜比咩神社蔵

いのえ  
猿の怪物に生贊を捧げる伝説は全国にあるが、石川県内、  
特に能登地域では「猿鬼」の退治譚が祭りや神饌と結びつ  
いて伝わる。猿鬼の遺品を伝える地域もあり、能登島の  
「猿鬼の角」は、牛馬や人に危害を加えていた猿の怪物を、  
弓の名手が見事に退治し、頭からもぎとったものという。



常設展  
展示中!

白澤  
はくたくず

はくたくず  
— 白澤図 (部分) —

◆ 佐々木泉景筆 江戸時代後期 当館蔵

ささきせんけい  
加賀藩御用絵師の佐々木泉景 (1773~1848) が伝説上のいき  
もの・白澤に取材した一幅。体じゅうに多数の角と眼をもち、頭  
に宝珠を戴く。人語を解し、森羅万象に通じるとされる白澤は、  
徳の高い為政者の前に現れる瑞獸であり、その吉祥性から、絵  
画や彫刻などの好題とされてきた。

みみたじし  
— 耳立て獅子 —

◆ 安政4年 (1857) 補修  
金沢市 西堀川町々会蔵 重さ12kg

金沢の獅子頭は大きさが特徴で、重さ10kgを超える頭も珍しくない。古い獅子頭には水に関する神威を現すものがあり、祭りに出すと豪雨になる、またはどんな雨も止むなどと伝わる。この「耳立て獅子」は浅野川大氾濫の折に流れてきたとされ、舌が動き、目がらんらんと光るなどまるで生きているようだったため、住民が丁重に祀ったという。

当館では3月22日(日)まで「ゴジラ博 in 金沢」を開催しています。「ゴジラ」は恐竜に似た巨大怪獣で、海棲爬虫類から陸上獣類に進化する過程の生物という設定のもとに誕生した想像上のいきものです。今号の石川れきはくでは、「ゴジラ博 in 金沢」の開催にちなんで、「想像上のいきもの」にまつわる資料を紹介します。奇妙で怪しい、不気味だけどかわいい、そんないきものたちの世界をぜひお楽しみください。



## 七人猩々図額

◆江戸時代 当館蔵

大きな盆の下にひしめき合う七体の猩々たち。先頭の一体は大きな柄杓を構える。猩々とは古代中国の書物に登場する生き物で、人の言葉を操り、大の酒好きという。日本では赤髪の福をもたらす存在として能などの題材となった。本作はもとは大聖寺(現在の加賀市)の商家に伝わり、作者の詳細は不明だが、「菅原」と読める印章が捺される。



## 銅猩々薄端

◆横河永定作 江戸時代 当館蔵

薄端は、薄手の金属製の花器で、瓶形の胴の上に皿形の広口を付けたもの。本作では猩々をかたどった胴に皿形の受台を組み合わせる。作者の横河氏は代々金沢の油木山で活躍した鋳物師である。酒に酔った猩々のなんともいえない表情が愛らしい。

# ゴジラ博 in 金沢

2026.1/17㈯-3/22㈰

時 間

月・火・水・木

10:00~17:00  
(最終入場時間16:40)

金・土・日・祝

9:00~17:00  
(最終入場時間16:40)  
※3月22日は16:00終了

会 場

石川県立歴史博物館

主催: ゴジラ博 in 金沢実行委員会  
共催: 北陸放送、エフエム石川  
後援: 北國新聞社



公式ホームページはこちら



## 資料紹介

# 「前田綱紀書状（木下順庵宛）」の年代について

◆ 学芸員 吉田朋生

加賀藩主として最長の在任期間を誇り、加賀藩中興の祖となったのが、加賀前田家5代の綱紀（1643-1724／在任期間1645-1723）である。その治世については、複数の評伝や人物叢書が出されるなど、藩祖・前田利家と並んで重要視されてきた藩主と言っていい。ただし意外なことに、人物研究の基本とも言える、関係資料を網羅的に把握し、その事績の中に位置づけていく作業は十分に行われてこなかった。

当館では、令和9年に予定している特別展を見据えて、綱紀関係資料の調査を進めている。その際に、既出の書状でも、年代が不明なものは比定（推定）していくことが重要な作業となる。当館では、昨年新たに収蔵したものを含む綱紀発給の書状9点のほか、家臣に送られた宛行状や礼状を所蔵している。今回はその中から、調査の過程で年代が明らかになった「前田綱紀書状（木下順庵宛）」を紹介したい。

本書状は、万治3年（1660）～天和2年（1682）に藩儒として加賀藩に出仕していた朱子学者・木下順庵に宛てられたもので、順庵と交流があった漢詩人の石川丈山に依頼した《愛蓮説》の扁額が届き、書の出来が良かったことの喜びを伝えている。《愛蓮説》とは、汚泥より出でて清廉無垢に伸びる“蓮”的もつ孤高の品性を“君子”に例えた漢詩で、宋代の儒家・周敦頤によって詠まれた。

この書状の年代を推定する手掛かりが、加賀前田家の伝来品を所蔵する公益財団法人前田育徳会の蔵品目録にある。昭和初期の『通常品目録 書画類』には、「無装書画 書部 上部」の中に「石川丈山書愛蓮説横物」が記録されている。残念ながら実物は現在確認されていないが、その記載から、書体は「隸書款云寛文六年臘月哉生明六々山人、八十四歳摺筆」、用紙は「絹本豎一尺五寸二分、横六尺一寸八分」であったことが分かる。「臘月哉生明」は“十二月の三日月”を意味することから、12月3日に扁額は完成しており、その20日後の日付を持つ本書状は、扁額の完成年である寛文6年（1666）のものと推定することができる。これは、差出名の綱利を名乗った期間（1654-83）とも矛盾しない。

寛文年間と言えば、綱紀が、寛文元年（1661）に国元への初入国を果たし、領国經營に本格的に着手した頃である。言わば、加賀藩主としての土台作りをしていた時期に、綱紀がどのような理想の君主像を抱いたのかは、興味深い点であり、儒教思想が重要な位置を占めたことを本書状は示唆している。

また、綱紀は木下順庵や室鳩巣をはじめとする儒学者を積極的に登用した藩主として知られる。綱紀政権において儒学者が果たした役割や政治思想に与えた影響を今後の課題に挙げたい。なお、綱紀関係資料の情報がございましたら是非ご一報ください。



以上  
寛嚴寒之節早速  
能々可有相達候  
石川丈山老へ相達之由  
珍重二候、右之趣  
即出来被差越之候、  
申述候、謹言  
被染筆之段怡悦  
不少候、委細此旨可  
極月廿三日 綱利（花押）  
木下順庵  
加賀  
（綱紀）

# 昔の新聞を読む

学芸員  
コラム

### Column

学芸主任 齋藤 仁志

一昨年、石川県立歴史博物館の学芸員として金沢に引っ越してきた際、私が真っ先に始めたことは、明治から昭和戦前にかけて石川県で発行されていた新聞を調査することでした。私が歴史資料としての新聞に注目し始めたのは修士課程在学中のころ。研究のために地方で発行されていた新聞を読んだところ、私はその面白さにすっかり魅了されました。それ以降、私は地方の新聞を積極的に活用した研究を続けてきましたが、新聞を資料として使うには独特的の難しさがあります。

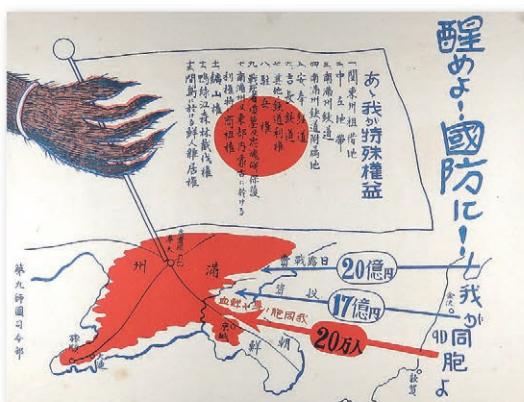
たとえば、新聞の情報は新聞記者などの“フィルター”を通したものであり、事実と異なる場合があるという点です。ある事柄について関係者の日記などの記述と新聞記事を見比べてみると、「改ざん」とまではいかずとも、ニュアンスが若干異なることはよくあります。また、広く知られているように、昔の新聞は政府から「検閲」を受けていたため、当局に不都合な情報は記事として掲載されないか、掲載されたとしても事実が歪められて報じられました。しかし、これらの難しさがあるからといって新聞を全く利用しないというのも、せっかくの有力な手掛かりを自ら捨てることになり非常にもったいないよう思います。上記の注意点をしっかりと考慮したうえで活用すれば、新聞は実に多くのことを教えてくれます。

石川県に来てからの調査の成果として一例を挙げると、当館に所蔵されている日本陸軍・第九師団のビラの正体が判明したというものがあります。このビラは、その内容から“第九師団が発行したこと”と“[満蒙問題]に関するものであること”は明らかで

したが、それ以外の情報の記載がないため、いつ、どのように配布されたのかはわからていませんでした。しかし、先日、昭和初期の新聞を調査していたところ、たまたまこのビラに関する新聞記事を発見しました。その記事によれば、このビラは満州事変勃発直前の昭和6年(1931)9月7日に、わざわざ飛行機を使って空から撒かれたものでした。そして、その情報をもとに更に調査した結果、件のビラの撒布について憲兵隊から陸軍の参謀本部に提出された報告書が存在することもわかったのです。

以上は、新聞が当館の所蔵資料をより深く理解するきっかけとなった例ですが、新聞からはそれ以外にも、地域のちょっとした有名人の動向であったり、小さな行事の日程や内容であったりと、その地域についての様々な情報を知ることができます。また、あわせて当時の「世相」や「雰囲気」といったものも感じることができ、個々の資料が成立した時代の背景を理解する一助にもなっています。

このように新聞は大変重要で面白い資料ではあります  
が、隅々まで調査しようとするとどうしても膨大な  
時間がかかります。また、なかなかお目当ての情報が  
見つからず、まるで一粒の砂金を砂漠で探しているよ  
うな徒労感を味わうこともしばしばです。更に、長時  
間調査していると、目も疲れ、腰も痛くなります。し  
かし、それらを我慢しても調査する価値が、新聞と  
いう資料には存在します。今後も体力が続くかぎり、  
昔の新聞を読んでいきたいと思います。



### 第九師団が撒布したビラ 当館蔵



『北國新聞』昭和6年9月6日付朝刊



# 特集 令和6年

「令和6年能登半島地震」の発災から2年が経過しました。当館は発災直後より今日まで文化財レスキュー事業に携わってきましたが、多い時で1ヶ月の半分近くあった活動日も、徐々に減ってきていることを実感しています。この2年間で多くの文化財を救えたいっぽうで、救えなかった文化財が存在することも確かです。いまだにレスキューを待っている資料もあることでしょう。当館は引き続き、文化財レスキューに積極的に参加し、かつ被災資料の収蔵・整理・調査研究を進めて参る所存です。

今年度の「特集 令和6年能登半島地震によせて」では、被災した文化財、被災地よりレスキューされた文化財をテーマとし、その歴史的意義や当館学芸員が考えたことを発信します。

## 船乗りの歴史との出会い

学芸員 吉原 敬平

当館のレスキューでは、能登外浦地域の、船乗りの方がいたお宅が対象になることがあった。これまでには、輪島市門前町の黒島や大泊などのお宅に伺う機会があり、船乗りに関する様々な資料を拝見した。

具体的には、船員学校の教材、船員手帳、海外の寄港地から家族に宛てられた絵はがき、海外の土産物、船乗りの方の日記など、近現代のものである。戦前と戦後の両方を確認した。この調査は私にとって、船乗りの歴史と出会いきっかけとなった。

日本の船員については、石川県、なかでもとくに外浦出身の者が多かったとされる。志賀町から富来町、門前町にかけての一帯は、「船乗りの町」と呼べるほど、船員を職業とする者が多かった地域だという。外浦は、日本の船乗りの歴史を探るうえで、見逃すことのできない地域といえよう。

外浦は、元来地形的に耕地面積が小さく、また海のシケが多いため、農業や漁業には必ずしも適した地域ではなかったといわれる。たとえば黒島では、江戸時代においてすでに農業との縁は薄く、帆船による廻船業が主な生業だったとされる。ところが、明治20年代（19世紀末期）以降、国内で汽船が使われ出すなか、業者たちはその導入ができずに次第に帆船は没落し、代わりに北海道の根室へ昆布採りなどの出稼ぎに行く者が増えたという。だが、出稼ぎも次第に振るわなくなり、昭和初期（20世紀前半）からは、帰郷後に商船会社などの船員に転じる者が見られるようになったという。

このように、働き場所を地元の外に求めなければならないという事情は、おそらく外浦内の他の地域にも共通することであり、外浦に多くの船乗りが生まれた要因の一つなのだろう。そして戦後に入っても、

石油危機で海運業界が不況を迎えるまで、船乗りは外浦での主要な生業となり、多くの人が、中学・高校を卒業後、船員学校を経て船乗りとなり、世界を股にかけて働いたようである（たとえば拝見した戦後の資料からは、北米、オーストラリア、南アフリカなどに行った例を確認）。

近現代における外浦の船乗りの歴史は、地域の生業における重要な位置にもかかわらず、十分に検討されてこなかった。文献は少なく、すでに指摘されている事柄も、断片的な聞き取りや言い伝えによる部分が多い。関連資料についても、ほとんど発見されてこなかったばかりか、そもそも民家など地域内に残る資料が、歴史を語りうるものとして認識されること自体が十分でなかったと思われる。また、外浦に限らず、近現代史全体で見ても、船乗りの歴史は検討の余地が多い分野と思われる。

そうしたなかで、当館のレスキューは、外浦の船乗りの近現代資料を発見し、歴史資料として焦点を当てた注目すべき取り組みだろう。また、見つかった資料は今後の研究の重要な手がかりであり、それによって、外浦、ひいては日本の船乗りの歴史を、より詳細に明らかにできる可能性がある。



黒島で拝見した資料の一部 個人蔵

# 能登半島地震によせて

Vol. 8

## 地域に密着していた珠洲焼

学芸主任 野村 将之

能登半島地震で大きな被害を受けた地域のひとつである珠洲市は、古来よりやきもの産業が盛んな地域である。中世には珠洲焼が、近世には正院焼や三杯焼が焼かれ、近代では「珠洲瓦」の発展が知られる。今回、近年まで地元で使われてきた珠洲焼の甕が発見されたので紹介したい。

この珠洲焼の甕は底部を欠失するものの、胴部を輪積み成形とし頸部まで叩き締め整形を施すという珠洲焼特有の特徴を持つ。肩の部分には印花文の刻印がひとつ施され、「コ」の字状に近い折り返しとなる口縁部の形状から鎌倉時代前期、13世紀前半ごろに生産されたとみられる。

本資料は30年前ごろに掘り出され、個人宅に保管されていたものである。もともと珠洲市内で水田の用水調整に使われていたものであるが、当時の情報に乏しく具体的な使用方法は定かではない。底部を欠いているという特徴をもとに現在の農水製品と比較すると、用水から水田へ水を供給する給水栓の保護管、あるいは地下かんがい用の水槽と形状が類似する。このことからあえて用途を推定するのであれば、これらの代用品として転用された可能性が考えられる。珠洲焼のなかには味噌甕や米びつ、漆壺、茶壺として近年まで使われた例が知られている。この甕もいつごろから水田の用水に使われたかは不明なもの、珠洲焼が持つ耐久性を生かして、近年まで人々の生活に密着して使用されたことを示す例として評価できる。

文化財レスキューの現場では、個人宅などに保管されている大量のやきものに出会う。その多くは江戸時代から戦前までのもので、購入された当初の役割を終え、蔵の中で「眠っていた」ものである。こうした資料群はいつ、どのような場で使われたかという記録・記憶を伴っていると、資料としての価値を最大限発揮できるが、こうした情報は世代交代や大災害の際に薄れたり失われたりしやすい。資料と情報を結びつける必要性は今回の地震でさらに高まっているといえ、今後も続く文化財レスキューでも資料そのものに加え、付随する情報にも注意して活動したい。



珠洲叩中甕 鎌倉時代前期（13世紀）当館蔵

## 当館の主な文化財レスキュー活動状況 【令和7年9月～令和7年12月】

期日	曜日	活動内容
9月 6日	土	輪島市 個人宅 レスキュー
9月 8日	月	志賀町 個人宅 レスキュー
9月12日	金	七尾市 寺院 文化財防災センター（以下、文防）現地調査参加
9月17日	水	輪島市 寺院 文防レスキュー参加
9月18日	木	珠洲市 個人宅2件 レスキュー
9月21日	日	いしかわ歴史資料保全ネットワーク（以下、いしかわ史料ネット）の協力による被災古文書の整理作業
9月23日	火	輪島市 寺院 文防レスキュー参加
9月24日	水	輪島市 寺院 文防レスキュー参加
10月 8日	水	金沢市 個人宅 レスキュー（穴水町からの避難資料）
10月24日	金	珠洲市 個人宅 レスキュー
10月25日	土	七尾市 個人宅 レスキュー
10月26日	日	いしかわ史料ネットの協力による被災古文書の整理作業
10月29日	水	七尾市 寺院 文防レスキュー参加
10月30日	木	七尾市 寺院 文防レスキュー参加
11月13日	木	珠洲市 個人宅 レスキュー
11月21日	金	輪島市 寺院 文防レスキュー参加
11月22日	土	輪島市 寺院 文防レスキュー参加
11月24日	月	いしかわ史料ネットの協力による被災古文書の整理作業
12月 8日	月	志賀町 個人宅 レスキュー
12月14日	日	いしかわ史料ネットの協力による被災古文書の整理作業
12月22日	月	金沢市 個人宅 レスキュー（珠洲市からの避難資料）

### 文化財レスキューとは

地震で被害を受けた、もしくは倒壊しそうな建物に残された「文化財」の救出避難・応急措置・一時保管を実施する事業です。

石川県では国の文化財防災センターと連携して学芸員によるレスキュー隊を編成しており、当館も県立博物館として活動にあたっています。

なお、ここで言う「文化財」とは、地域の歴史を伝える有形文化財や有形民俗文化財を指しますが、指定の有無は問いません。

**2月 休館日：なし**

- |            |   |           |
|------------|---|-----------|
| 4日<br>(水)  | いしかわ歴史講座 13:30～15:00<br>「石川からの北海道移民」<br>講師：齋藤 仁志（当館学芸主任）    | 聴講無料／申込不要 |
| 12日<br>(木) | 令和7年度後期古文書講座（入門編）<br>第1回 13:30～15:00<br>講師：齋藤 仁志（当館学芸主任）    | 聴講無料／要申込  |
| 14日<br>(土) | れきはくゼミナール 13:30～15:00<br>「古墳が語る能登の古代社会」<br>講師：三浦 俊明（当館資料課長） | 聴講無料／申込不要 |
| 18日<br>(水) | いしかわ歴史講座 13:30～15:00<br>「石川の神饌文化」<br>講師：大門 哲（当館学芸主幹）        | 聴講無料／申込不要 |

26日 令和7年度後期古文書講座(入門編) 聴講無料／要申込  
第2回

第2回 13:30~15:00

講師：齋藤 仁志（当館学芸主任）

3月 休館日：3/23(月)～3/24(火)

- |            |  |           |
|------------|--|-----------|
| 4日<br>(水)  | <b>いしかわ歴史講座 13:30~15:00</b><br><b>「石川」の祭礼風流と芸能」</b><br>講師：大井 理恵（当館学芸課長）            | 聴講無料／申込不要 |
| 7日<br>(土)  | <b>令和7年度館長講演会 13:30~15:00</b><br><b>「豊臣秀吉の「唐入り」と前田利家」</b><br>講師：藤井 譲治（当館館長）        | 聴講無料／要申込  |
| 14日<br>(土) | <b>れきはくゼミナール 13:30~15:00</b><br><b>「大正期石川における電力需要の高まりとその対応」</b><br>講師：吉原 徹平（当館学芸員） | 聴講無料／申込不要 |

令和  
8年度

# れきはくメイト会員募集

3月1日(日)より、令和8年度「れきはくメイト」の新規・更新受付を開始します。「れきはくメイト」とは、石川県立歴史博物館をより身近なものとしてご利用いただくための組織です。ご入会いただくと、入館料割引や会員限定イベントへの参加、最新情報の送付など様々な特典があります。

会 費 1,500円（大学生以下750円）  
※10月以降のご入会は一般750円となります。

## 特典例

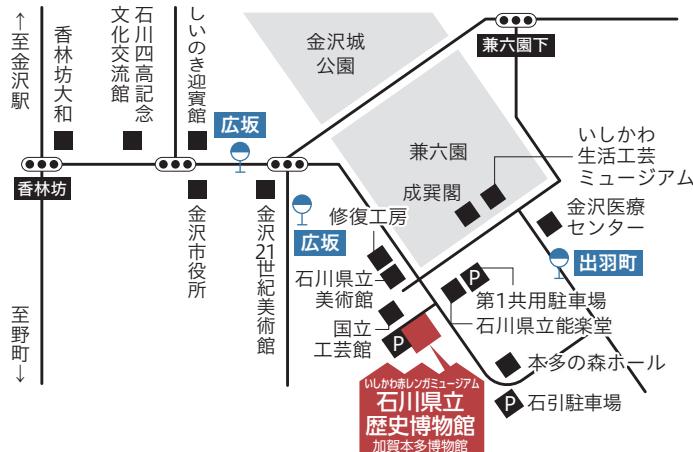
- 1 会員証提示により、当館の常設展示を無料で観覧できます。
  - 2 会員証提示により、当館の特別展を団体料金で観覧できます。
  - 3 会員証提示により、当館の特別展を年1回無料で観覧することができます。
  - 4 当館の最新情報を会員限定の情報紙でご案内します。
  - 5 当館が主催する会員限定イベントに参加できます。
  - 6 会員証提示により、当館で販売する図録やオリジナルグッズを10%割引で購入できます。

## 申込方法

来館もしくは郵便振替でのお申込みとなります。

## お問い合わせ

当館HPまたは普及課(076-262-3417)までお問い合わせください。



# 石川県立歴史博物館 ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1  
TEL: 076-262-3236 FAX: 076-262-1836  
E-mail: [rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp](mailto:rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp)  
<https://ishikawa-rekihaku.jp/>



広告

# KITEN SCHOOL 大人のための デザインスクール

キテンスクールのオンライン授業なら…

- 01 オンラインで好きな時間にマイペースで学べます
  - 02 スキルアップ・副業・趣味に注力せます

## 詳しい資料の ご請求はこちら



キテンスクール tel:072-668-3275

〒569-0071 大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501 運営 株式会社ウイット